

『木を植えた男』読解

山 本 省

信州大学農学部森林科学科

Lecture de l'homme qui plantait des arbres

Satoru YAMAMOTO

Département des sciences forestières, Faculté d'Agriculture,
Université de Shinshu

Sommaire

Cette petite histoire qui raconte la vie d'un vieillard qui avait la générosité de continuer à planter des arbres toute sa vie et a réussi à ressusciter une région jadis déserte, elle se base sur l'expérience de Giono lui-même, qui a, lui aussi, planté des arbres avec son père dans sa jeunesse. Cette joie de planter des arbres était très chère chez Giono. Il avait déjà pleinement développé, dans son chef-d'oeuvre *Que ma joie demeure*, ce thème de la joie de vivre. En écrivant l'histoire fictive de cet homme qui plantait des arbres, Giono nous persuade de l'importance de la forêt. La fiction est parfois plus vraie que les faits.

(Bulletin Fac. Agric. Univ. Shinshu 33 : 51-60, 1996)

Mots-clé : planter des arbres, générosité, joie de vivre

『木を植えた男』が「ジャン・ジオノ友の会会報」¹⁾第5号に発表されたのは1975年のことである。ジオノがこの作品を執筆したのは1953年だから、20年以上たってからのことだった。まず、この間の事情を同会報に掲載されているジオノの長女アリーヌ・ジオノの文章を手がかりにして振り返ってみたい。

「私がこれまで出会ったうちでもっとも並外れた人物」について書いてほしいというアメリカの雑誌「リーダーズ・ダイジェスト」の要求に対して大いに乗り気になったジオノは、数日で『木を植えた男』を完成し原稿を郵送した。それに対する数日後の雑誌社の反応はきわめて好意的なものであった。

数週間後、雑誌社から2通目の手紙が届いたが、そこでは前回とは打って変わりジオノを「詐欺師」と非難しつつ、作品は雑誌に掲載するわけにはいかないと原稿を送り返してきたのだった。雑誌社は社員に調査させてみたが、1947年にバノンの救済院で亡くなったはずのエルゼアール・ブフィエの名前は見当たらないし、ヴェルゴンに復活したはずの森林も存在しなかったのである。それに、ヴェルゴンという地名はオート・プロヴァンス地方に存在す

るのは事実だが、作品が展開する地域とはかなり隔たったところにある。ジオノは現実の地名や人物名をかなり自由に借用するのを習慣としていたのである。

その時のジオノの反応をアリーヌは次のように説明している。

父はそうした状況を滑稽なことだと思ったが、当時の父の心を占めていたのは、私は今でもはっきり記憶しているが、作家に、つまり作り話の専門家に、彼が出会ったうちで、もっとも並外れた人物について問いながら、その人物が必然的に彼の想像力から生まれてくるということを理解できないほど愚かな人間が存在するということに対する驚きであった。²⁾

ジオノはこの間の事情についてすべてを家族に語っていたわけではなかった。アリーヌも知らない事実があった。調査員はオート・プロヴァンス各地を歩きまわりブフィエの足跡も復活した森も見つけることができず、ジオノ家に釈明を求めにやって来ていたのだ。ジオノはヴェルゴンという村はそのあたりのいくつかの村を総合したものだとか、ブフィエは事実存在したのだが、自分が書いた物語より昔のことであるとか説明し、ブフィエを覚えてはいるはずの幾人かの(架空の)名前を教えた。再度調査が虚しく続けられたあと、上述の2通目の手紙が届いたのである。かくして雑誌への掲載は打ち切られた。

この作品について何らかの情報を得たと思われる同じくアメリカの雑誌「ヴォーグ」がジオノにテキストを求め、「希望を植え幸福を育てた男」³⁾というタイトルの英語訳を1954年3月15日に発表した。イギリスの「ヴォーグ」誌にも掲載されたりしたあと、ロンドンの「木と生命」という雑誌にも掲載される(1956年夏)。この雑誌でジオノの作品を読んだある読者がジオノに作品の背景の詳細を求めて手紙を書いてきたが、それに対してジオノは次のように説明している。

あなたを幻滅させて申し訳ありませんが、エルゼアール・ブフィエは創作された人物です。そのねらいは木を好きになってもらうこと、あるいはより正確に言うと木を植えることを好きになってもらうこと(これはずっと以前から私がかつとも慣れ親しんでいる考えです)にありました。ところで、結果から判断すれば、この目標はこの想像上の人物によって達成されました。⁴⁾

このあとジオノはこの作品が翻訳された国を10ほど列挙しているが、それほどこの作品はさまざまな国で読まれていたというのが事実であるらしい。しかも、発表された雑誌はForest, The Trout, Resurgence, Vendepunkt (Zurich), Oekojournal⁵⁾といったエコロジー関係のものが多い。奇妙なことにフランスでは1974年になってはじめて出版されている。Revue forestière (1973年), Le sauvage (1974年7月), Centre Midi Magazine (1974年12月)。そしてついに上述のジオノ協会の会報に掲載されるとともに、ブフィエという人物はジオノの創作だということが明らかにされた。

なお、1968年にシュトゥットガルトの出版社からジオノのテキストを出版するに際してブフィエの写真を送ってほしいと懇願されたジオノはからかいの精神をおさえきれず、古物商

で手にいれたある老人の古色蒼然とした写真を送ったりした。1977年、フランスのさる子供向けの雑誌が「世界を変える」と題してジオノのテキストを掲載する。本文はそのままであるが、その結末には、プフィエの偉業に感銘を受けた時の政府は彼に年金を与えるというおちがついているということだ。⁶⁾

内容を検討する前に、この簡潔な作品はプロローグとエピローグという枠組みをはめられているということに注目しておきたい。それぞれ引用しておこう。

人間の人格がそのヴェールを取り除き正真正銘例外的な長所を我々の前に現すということがおこるためには、我々がその人の行動を長い年月にわたって観察するという幸運にめぐりあう必要がある。もしその行動が一切のエゴイズムと無縁であるならば、もしその行動を導く思想がたとえるもののないほどまでに公平無私であるならば、もしその行動がいかなるところにも代償を求めたことがなく、その上その行動が地球上に目に見える足跡を残したということが絶対に確実であるならば、その時、我々は、間違いなく、ひとつの忘れがたい人格の前にいることになる。(プロローグ)

自分自身の肉体的精神的能力だけを使うことによってたったひとりの男が砂漠からこのカナーンの地を出現させることができたという事実をよく考えてみる時、私は、いずれにしろ、人間の状況は素晴らしいものだと思う。しかし、この結果を達成するためには、偉大な魂の粘り強さと公平無私の執拗さがいかほど必要だったかということを考える時、教養もないのに神が行うに相応しいこの仕事を成功に導いたこの老農夫に対して限りなく尊敬の念を覚えないわけにはいかない。(エピローグ)

木を植えた男を一言で言い表すとすれば、2つの引用文のいずれでも用いられている言葉「公平無私」(Générosité)の体現者ということになる。ちなみに、「ロワイヤル仏和辞典」ではこのGénérositéという言葉の訳語は次のようになっている。

- ① 寛大、度量、無私無欲
- ② 気前のよさ、〔複数で〕(気前のいい) 施し、贈物
- ③ (ワインの) 芳醇さ、こく、(土地の) 肥沃さ、(果樹の) 実りの豊かさ、(衣服の) ゆったりした感じ
- ④ 〔古語〕 高潔、高邁

何の見返りも求めない気前のよい行為を意味するのがよく分かる。訳語としては「無私無欲」が適当かもしれないが、それではいささか豊かさの概念が欠落するので、ここでは4番目の意味をも考慮に入れ「公平無私」という言葉をとることにした。というのも、高邁の精神はかのデカルトが何よりも尊重した概念であり、ジオノもその間の事情を知りながらこの言葉を使ったと推測できるからである。

かようにして私の思うに、人間が正当になしうるかぎり最大限に自己を重視するよう

にさせるところの、真の「高邁」とは、ただ次の2点において成り立っている。すなわち、そのひとつは、上述の自由な意志決定のほかには真に自己に属しているものは何もないこと、また、この自由意志の善用・悪用の他には正当な称賛あるいは非難の理由は何もないことを認識することであり、他は、みずから最善と判断するすべてを企て実行するために、その自由意志をよく用い、意志をけっして捨てまいとする確固不変の決意を自己自身のうちに感得すること、である。すなわち、完全に徳に従うことである。⁷⁾

『方法序説』では「できるだけしっかりした断固とした態度」をとる人間の例として旅人が挙げられている。毅然とした態度こそデカルトのもっとも重視した生き方だったからである。

旅人はどこかの森でたまたま迷っても、あちらの方、こちらの方と、ぐるぐるさまよひ歩いてはなりませんし、一箇所に足を止めていることはなおさらいけません。いつも同じ方向にできるだけまっすぐ歩き、その方向をとる決心をしたのがおそらくはじめはただの偶然にすぎなかったとしても、つまらない理由でその方向を変えてはならないのです。というのも、このやり方によれば、旅人が行きたいと思うところへちょうどうまく行くことはないにしても、少なくとも結局はどこかへ行き着くでしょうし、その方が森の真ん中にいるよりは本当にましだと思われれますから。⁸⁾

ブフィエは家族をなくしたあと、50才の頃からひとり黙々と荒れ地に木を植え続けるが、この仕事が彼の後半生の天職になる。この態度は「考えるもの」に徹するため可能なかぎり世間との交際を避けたデカルトや、コルク部屋に閉じこもり作品完成に全力を尽くしたプーレストや、夜明けとともに眼をさまし『カイエ』の前で思索を深めていったヴァレリーなどの断固とした態度を想起させるに充分である。

さて、この木を植えた男の物語はジオノの文学のなかで唐突に姿を見せたものではけっしてない。ジオノ自身が少年時代に父親の散歩についていきドングリを植えたことがあるという経験が一役かっているのも事実であろうが、すでに1934年に発表された長編小説『喜びは残る』のなかでこのテーマは存分に展開されていたのである。そこでは6つの家族の住んでいるグレゴア高原が舞台になる。住人たちは『木を植えた男』のなかで描かれている荒涼たる山村ほどではないが、ともかく潤いのない生活を強いられている。彼らは互いに親しく話し合うという習慣さえ失っていた。そこへやって来た流れ者ボビが生きることの喜びを教えていく。その喜びはじつに多岐にわたっている。自然をじかに感じることの喜びからはじまり、動物を飼う喜び、植物を育てる喜び、さらに食事をともにする喜び、恋の喜び、また友情の喜びなどが存分に追究されている。ジオノはこの作品によって寒村における人間の再生の可能性を追究したのであった。

『木を植えた男』はそうした多様な喜びのうちのひとつの喜びを取り上げた作品である。それだけその作品は簡潔に仕上がっている。物語が成立するためにはその背景が必要である。作者の代弁者と思われる「私」はプロヴァンスの北のバス・ザルプ地方の荒涼とした高地を、

何が目的なのかは書かれていないが、歩きまわっていた。この「私」についての記述は意外に少ない。文明から離れて、自然のなかを、しかもよりによって荒涼たる荒れ地を歩きまわるといことは、「私」という人物が何らかの価値感の喪失というような危機を迎えていたということを物語っていると考えられる。「私」が孤独な生活には慣れていたといことは指摘されている。

まだ若かったにもかかわらず、当時私自身も孤独な生活を送っていたので、孤独者の魂に思いやりをもって触れることができた。

しかしながら、その孤独者への思いやりは十分なものではなかったことがすぐ付け加えられている。

私は間違いをおかしてしまった。まさしく私が若かったがために、自分中心の観点から、またある種の幸福の追究のようなものとして未来を想像してしまったのだ。

木を植えるというプフィエの行為を「幸福の追究」のみにとどまらない壮大な生涯を賭けた企画だということが彼には理解できなかった。そのことは14年戦争のあとで明らかになる。

その翌年、14年戦争が勃発し、私は5年間従軍した。歩兵隊の一兵卒が戦争中に木のことに思いを巡らせることなど不可能だった。実を言えば、その問題は私の内部に痕跡さえとどめていなかった。私はそれを趣味、切手の収集のごときものとみなし、忘れてしまっていたのだ。

しかしながら、「私」はふたたびその荒涼とした地方を訪れる。その理由は次のように説明されている。

戦争が終わり、わずかばかりの復員手当をあてがわれて除隊した私は、澄んだ空気を少し吸ってみたいという抑えがたい欲求を覚えた。私があの人里離れた地方への道を再び辿って行ったのはひとえにその欲求のためであり、それ以外のことを何かあらかじめ考えていたわけではなかった。

このような記述は何を意味するのだろうか。何かを求めずにはいられない若者がほとんど無意識にその荒涼とした土地に引きつけられるといことは、彼が、意識はしていないが、そこに何か重要なものが潜んでいると感知していたからである。はっきり意識してはいないが、何かがあることを感じているが故にこの若者は再度その土地を訪れるのである。

これとほぼ同じようなことが上述の『喜びは残る』でも生ずる。生活に何か欠けているのを感じずにはおれない主人公ジュルダンが誰かが自分の心の隙間を満たしにやって来てくれるのを待ち望んでいる。「そういう人物が1人やって来る。そのことがぜひ必要なのだ。青々と茂っているような心を持った男が1人。そういう男がいるということを知るだけで、

フルートの調べが聞こえ、希望が湧き、森を一周する長い道を辿りたくなるのである。」⁹⁾ 彼は何かの到来の予感に震えている。

ついにある途方もなく美しい夜、ジュルダンはそうした男の出現の予感に促され畑にでて耕す。予感は実現する。

すでに確実に何かが変わっていた。犁刀が一層素早く切り裂く土や、荷枠の鎖にあたって音を出す馬の蹄鉄にしてすでにどこか変わっていた。

畝の端まで辿りついた時、彼は「今だ、見るぞ！」と考えた。

畑は森の方へと上り坂になっていたが、そこにその男が闇夜を背景にしてくっきりと立っていた。まさに闇夜と畑とを分ける線の上にその男の身体があった。それはたしかに男だった。両脚を開いて立っており、その両脚のあいだから闇夜とひとつの星を見ることができた。¹⁰⁾

かくして、ジュルダンの待ち望んでいた人物ポビはまさにジュルダンが欲していることを次々と語りそして行為で示していった。ジュルダンは自らの分身のようなポビに導かれ自身自身を取り戻していく。かくして、この作品は自己発見の物語となる。

同じことがこの「私」についても言える。その彷徨は若者の自己発見の旅だったのである。「私」は次第にプフィエの企画の壮大無比に気づいていくのだが、同時に彼は自分が無意識に求めていたものをそこに見いだしたはずである。そのように考えてみるならば、このプフィエ老人とは若者「私」のもうひとつの自我でもあるのだ。事実、プフィエ老人が若者の前に姿を現したのは、若者が社会から完全に隔離された状態で水を求めて彷徨しているときであり、そのようなとき、人は必然的に自分自身との問答を繰り返しているはずである。自分の意識の彼方から浮かび上がってきたのがプフィエ老人の姿をまとったもうひとりの自分だと推論しても、あながち的をはずれていると言うことはできないはずである。

あるのはただ変わる事のない乾燥と木本植物だけだった。その時、はるか彼方に小さく黒いシルエットが立っているのが見えるような気がした。孤立した木の幹だと思った。ともかく、私はその方向へと進んでいった。それは羊飼いだ。30頭ばかりの羊が彼の傍で焼けつくような地面にうずくまって休息していた。

『喜びは残る』の主人公ジュルダンのように羊飼いの出現を期待していたわけではなかったが、何かを求めつつ彷徨していた「私」の前に現れた羊飼いはデカルトの言う「高邁」の精神 (Générosité) を体現した人物だということが分かる。

その男はほとんど話さなかった。それは人里離れて生活する隠者にはよくあることだ。しかし、彼は自分の行うことに確信を持っておりその確信に自信を抱いている人間だということが感じられた。そうした彼の物腰はすべてをはぎとられたこの地方では珍しかった。

14年戦争のあとで2度目に会ったときの「自分の思想を実行している」プフィエの内面を推測させる描写は次のようになっている。

創造は、さらに、連鎖的に行われているようだった。彼は別に苦労してそうしたわけではなく、自分のきわめて単純な務めを執拗に追究しているにすぎなかった。しかし、村へ下りてくると、私の記憶では常に干上がっていた小川に水が流れているのが見えた。それは私がいままで目にしたうちで最高に素敵な逆戻り現象だった。これらの干上がっていた小川には、はるか昔、水が流れていたのである。

プフィエは慈善事業を行っているのではなくして、「自分の思想を実行している」のだということ認識しておく必要がある。彼は木を植えることを自らの天職と考えているのである。それはデカルトが哲学に没頭したのと同じことである。つまり、この物語は、思想の実践、幸福の追究、喜びの創造の書だと言ったことができる（ただし、この作品では、プフィエの側からの記述がなされていないので、彼がどのような幸福や喜びを体験したかということについては具体的に描写されているわけではない）。

自己のなかに潜んでいる可能性としてのもうひとりの自己の発見の物語としてはヴァレリーの『テスト氏との一夜』が著名であるが、この『木を植えた男』もそうした物語の系譜に属すると考えられる。ジオノの分身である「私」が、さらに「私」の分身であるプフィエに出会い、自らのアイデンティティを見いだしていくという構図になっている。現実生活においては作家として存在していたジオノのなかに可能性としてあった「木を植える男」がフィクションのなかで生命を獲得し、実際に生命を持った人間以上に真に迫る存在感を帯びることによって読者をひきつけるのである。子供のときジオノは父親と一緒に散歩しながらドングリを植えた体験を持っているが、ジオノが敬愛してやまなかった父親の姿もプフィエに投影されていると考えるのが妥当であろう。

さて、ジオノが生まれ、生涯を過ごしたマノスクはオート・プロヴァンス地方の南端に位置しているが、『木を植えた男』で問題にされている場所はその北西に広がる荒涼たる高原地帯である。「それは標高がおよそ1200メートルから1300メートルの植物の生えていない単調な荒れ地であった。わずかに野性のラヴェンダーが見られるだけだった。」自然環境があまりに厳しいため、いくつかの村は見捨てられ、廃墟が残っているだけだった。

私はその地方の奥深くを横切っていたが、3日歩いた後、前代未聞の荒涼たる土地に入り込んだ。見捨てられた村のある廃屋の傍らで私は野営した。前日から水がなくなっていたので、水を探す必要があった。廃墟になっているとはいえ、雀蜂の巣のようなその集落は、かつてはそこに泉か井戸があったに違いないと想像させるに充分であった。なるほど泉は残っていたが、涸れていた。風と雨にむしばまれてしまった屋根のない5、6軒の家や崩れはてた鐘楼を備えた小さな教会が、住人のいる村や教会であるかのようにならなっていたが、そこには生命の気配は全く消え失せてしまっていた。

人が住んでいる村もあるが、そこでの生活はほとんど人間の生活と呼べないほどのものである。以下に引用するそうした村の光景はやや誇張されてはいるが、本質的には『喜びは残る』の高原の寒村にも当てはまる。

それらの村には炭作りの樵たちが住んでいた。そこでは生活は苦しかった。極度に厳しい気候のもとで互いに身を寄せ合って生活している家族たちは、外部との接触もなく、夏も冬も自分たちのエゴイズムをつのらせていった。いわれのない野心が、その土地から逃げだしたいという執拗な欲求にかられ途方もなく膨張していく。男たちは炭を荷車で町まで運んでいっては戻ってくる。頑丈きわまりない性格でさえこの果てることのない吉凶の繰り返しには消耗してしまう。女たちは怨恨を養う。教会の座席から炭の売却にいたるまで、互いに競り合って行く美德、互いに競り合って行く悪徳、そして悪徳と美德の漠然たる混合物にいたるまで、あらゆる機会に休みなく彼女たちは小競り合いをする。それに加えて風が休みなく神経をいらだたせる。自殺や、ほとんどの場合死にいたる数多くの狂気が流行る。

そうした荒涼たる村が復活するのはプフィエ老人のためまぬ植林によるのであるが、それがあたかも事実であるかのごとく読者に想像させるのは、作者ジオノが理想的な村の鮮明なひな型を思い描くことができたからでもある。生命感に満ち溢れた村の描写はきわめて具体的である。

すべてが変わってしまった。空気までも。かつて私を迎えた乾燥した粗暴な突風の代わりに、香りのよい柔らかな微風が吹いていた。水の流れから発しているかと思われるような音が丘の方から聞こえてきたが、それは森を通り抜ける風の音だった。最後に、一層驚くべきことだが、池を流れる正真正銘の水音が聞こえた。泉が作られていたが、そこにはたっぷりと水が溢れており、また私が最高に感激したことに、その泉のほとりには既に優に4年はたっているかと思われる菩提樹が植えられていたが、その菩提樹は既に豊かな枝を茂らせており、有無を言わせぬ再生の象徴になっていた。

このように形容された村からさらに奥に入っていくところには理想郷のような村が存在する。都会を嫌悪し、生涯マノスクに住みつづけたジオノにしてはじめて可能になった光景であろう。名声も富ももたらさないごく質素な日常的な喜びこそジオノの求めたものであったのだから。「私」がプフィエ老人と再会する場面がでてこないのは、作者ジオノがこの楽園のような村の描写で作品を閉じるのがよいと判断したからである。

あの時代からわずか8年しか経っていないのに、その地方全体が健康とゆとりで輝きわたっていた。1913年に私が見た廃墟の跡にモルタル塗りの小綺麗な農家が建っていたが、その建物には幸福で快適な生活が感じられた。古くからあった泉は、森が蓄えた雨や雪によって養われ、再び水が流れ始めていた。そこから水路が引かれていた。それぞれの農家の傍らのカエデの茂みの中で、泉から流れてきた池の水は新鮮なハッカの絨毯

の上へと溢れ出ていた。村々はそれまで少しずつ再建されてきたのである。地価がそよりも高い平原からやって来た人々がその土地に定住し、若さと活動と冒険精神をもたらした。道を歩いていると栄養のよい男女や、田舎の祭りの嗜好を取り戻した笑顔の青少年少女たちに出会う。穏やかな生活ができるようになってからはかつての惨めな姿は影をひそめてしまった昔からの住人たちと、新しく定住した住人たちを加えると、1万人以上がその幸福をエルゼアール・ブフィエから与えられたことになる。

自然保護が声高く叫ばれる以前にジオノがこのような作品を書くことができたのは、彼が日常的な喜びを何よりも大切に思っていたからであり、また都会よりも自然の豊かな地方都市に住むことを受け入れていたからである。ジオノは生前失われていくプロヴァンス地方の魅力に敏感でその100の相を数えあげたりしたこともある。¹¹⁾ ジオノの1930年代の小説のテーマはまさしく「世界の歌」であり、それはそれ以前の人間中心の小説に取って代わるはずのものであり、そこでは人間と等しく自然の全体が取り扱われたのである。

なお、荒れた土地に最初に植える木としてドングリの木（ここではナラと訳したが原語はChêneである）はかならずしも最適ではないということと同僚の先生に指摘いただいた。しかし、ジオノがブナやシラカバに先立ってあえてナラを登場させたのは、子供のジオノは父親と実際にドングリの実をブフィエのように植えた経験があるということから、また、フランス人は一般的にブナ、シラカバ、モミよりも圧倒的にナラを好むという事情から説明できるであろう。

最後に、『木を植えた男』は文学作品としても優れているが、ジオノの作品全体のごく一部分にすぎないということを指摘しておきたい。それぞれ1500頁ほどあるジオノの小説作品集6巻（プレイヤッド版）のなかでこの作品は本文にしてわずか11頁を占めているにすぎない。数千頁にわたるジオノの豊かな小説世界がその彼方に広がっているのである。他の作品についてはいずれ稿を改めて論じるつもりである。

要 約

生涯木を植え続けることによって荒れ果てた地方を再生させた老人の物語は、作者ジオノが子供時代に父親とドングリの実を植えたという体験に根ざしており、木を植えるという喜びは彼にとってきわめて親しいものであった。生きる喜びは傑作『喜びは残る』のなかで縦横無尽に展開されたテーマである。この架空の物語を書くことによってジオノは読者に森の大切さを納得させる。虚構の物語が事実より雄弁なことがある。それが小説家の仕事である。
キーワード：木を植える、公平無私、生きる喜び

註

- 1) Bulletin No 5 de l'Association des amis de Jean Giono.
- 2) Ibid. P.21.

- 3) The man who planted hope and grew happiness.
- 4) Jean Giono, *Œuvres romanesques complètes*, Tome 5, P. 1408, Pléiade, Gallimard, 1980.
- 5) 以上5つの雑誌の出版年等は不明。『ジオノ小説全集』第5巻の巻末(1408頁)のピエール・シトロンによる注釈参照。
- 6) Voir *Ibid.* P. 1409 (La notice de Pierre Citron).
- 7) Descartes, *Les passions de l'âme*, *Œuvres philosophiques*, Tome 3, Art.153 (En quoi consiste la générosité), Garnier, 1973. 訳文は『デカルト著作集』第3巻(白水社, 1974)のものを借用する。
- 8) Descartes, *Le discours de la méthode*, *Œuvres philosophiques*, Tome 1, P.595, Garnier, 1963. 訳文は『デカルト著作集』第1巻(白水社, 1973)のものを借用する。
- 9) Jean Giono, *Que ma joie demeure*, *Œuvres romanesques complètes*, Tome 2, PP.420-421, Pléiade, Gallimard, 1972.
- 10) *Ibid.* P.421.
- 11) Jean Giono, *Provence perdue*, Edition du Rotary Club de Manosque, 1979.